

青木正兒博士の「名物学」と 名古屋大学図書館の青木文庫

張 小 鋼

はじめに

青木正兒博士は昭和三十九年十二月に亡くなった後、当時の名古屋大学文学部の水谷真成教授が青木博士の未亡人である艶子夫人に依頼し、夫人の好意で約千点の本、原稿、ノートなどを譲り受けた。それがいまの青木文庫である。青木文庫の目録には、『青木文庫展覧会陳列書解説』（昭和四十九年）、及び『名古屋大学中国語学文学論集』第一輯（昭和五十一年）、第二輯（昭和五十二年）に掲載の「名古屋大学所蔵 青木文庫目録（一）、（二）」がある。

筆者は青木文庫を紹介する適任者ではないが、せっかくのよい勉強の機会だと思って、青木博士とその学問の理解を深めるために、「毛遂自薦」で今鷹教授の指導のもとで、主として青木博士の原稿、ノートなど、本以外の貴重資料を閲覧し、簡単な整理を試みた。いま、「越俎代庖」の嫌を冒して結果をみなさんに報告するわけである。少しでもご参考になれば幸いに思う。

一、青木ノートの基本状況

青木ノートは全部で以下の如く12冊ある。

| | |
|-----------|-----------|
| 蓬盧雜記 | 大正九年夏起 |
| 講書雜錄 | |
| 鄙事備忘 | 昭和二十年四月起 |
| 竹窓雜鈔（一） | 昭和二十一年七月起 |
| 竹窓雜鈔（二） | 昭和二十一年八月起 |
| 鴻城雜錄 | 昭和二十五年四月起 |
| 鼓東雜錄（一） | |
| 借讀鈔存（二～六） | |

そのうち一番古いノートは『蓬盧雜記』で、これは青木博士の研究題目のメモ集である。ノートには全部で49條の題目が挙げられているが、そのうち1～45條については「以上大正十三年東北大へ赴任前ノ雜記也。」、46～49條については「これは蓋し昭和十三年京大へ転任前の腹案なれば、十二年秋頃の腹案なるべし。」との博士自身のメモが付されており、時期的に前期と後期に分かつことができる。前期の條目からは、博士の関心が主に文学、戯曲、芸術にあることがわかるのであるが、後期の條目のなかに「支那ニ遊ぶ前支那料理ノ旨イ事ヲ聞カサレ」という「名物学」に関わる題目が既に見られることには注目してよからう。

『講書雜録』は博士が講義するとき、説明するためのメモで、前半は主に画論関係、後半は主に詩と賦に関する内容である。たとえば、『六如畫譜』『小山畫譜』『楚辞』などの書籍から数多くの條目を抄録している。画論や詩と賦関係の書物を解説するのに有力な手引きであると思われる。

この二冊については、以上簡単な紹介にとどめるが、他の十冊のノートについては、博士の「名物学」の重要な資料と考えられるので、「名物学」との関わりの中で、次章で少し詳しく論じたいと思う。

二、青木名物学の成立とノートとの関係

「名物学」については博士の『中華名物考』（単行本、春秋社、昭和三十四年六月刊。同じく春秋社の『青木正兒全集』第八卷所収、昭和四十六年六月刊。以下、単行本を「単」で記し、全集第八卷を「全八」で記す）の「自序」に詳しい説明がある。また、博士の訳注の『隨園食單』に水谷真成教授の詳しい説明もある。ここでは、それらをもとに主として「名物学」の成立とノートとの関係について簡単に述べて置く。

「自序」によると、博士は京大在学中、「専攻の支那文學の理會を助ける爲に、中華の風俗を知る必要を感じて、折々研究室で上海出版の『點石齋畫報』を楽しみつゝ閱覽し」（単p.1、全八p.3）、休暇で帰郷中、『清俗紀聞』（十三卷本、寛政年間長崎奉行中川忠英編）を一冊欠けているにもかかわらず、「飛び付いて買って來た」（同上）そうである。また、江戸時代の山東京傳の『骨董集』、柳亭種彦の『還魂紙料』、喜多村信節の『瓦礫雜考』『筠庭雜考』などの書に、「古圖を徵引して昔の風俗器物を考證してゐるのに

心を牽かれて、中華の風俗を研究するにも、一法として當に此れを學ぶべきであると痛感し」（同上）、そのため、大正十四年、博士が北京留学の際、画工を物色し、『北京風俗圖譜』を書いてもらったのだということである。それは、前掲の中川氏の『清俗紀聞』の南方（浙江、福建）風俗の内容に対し、北方の内容を補完するという意味もあつてのことだった。

ちなみに青木文庫に保管されている『新春畫冊』（二冊）という風俗画もその当時博士が北京で収集したものである。さらに青木文庫には、風俗画のほかにも、下記の如き貴重な資料もある。

- ・『戲單』 大正十四年四月
- ・『門票』 注1
- ・『前臺梁塵錄』
- ・『鷄肋』
- ・『祭禮紙様』 大正十五年二月
- ・『神碼及娘娘碼』 大正十五年二月

上記の資料はいずれも博士が北京、上海滞在の間に当時の中国で実際に用いられていた切符等の類を丹念に集めたものである。内容は「風俗研究」の範囲内であるが、既に「名物研究」の要素が若干含まれていると考えてよい。たとえば、「局票」（当時芸人を呼ぶときに使ったかきつけ）という名を聞いても、いまの日本人は勿論のこと、現代の大陸の中国人（台湾、香港は不詳）にとってもそれがどういうものであるか知る者はほとんどいないのではないか。ところが、この『門票』の中には実物の「局票」が保存されており、我々が当時の風俗を知る上で実に貴重な資料を提供してくれるとともに、青木博士の興味が当時既にこういったところにまで及んでいることを知ることができるのである。このように、これらの資料は「青木名物学」の胎動期を研究する上で重要かつ確実な資料であると考えられるのである。

博士が本格的に「名物研究」をはじめたのは昭和十六年、京都大学に転任して三年目である。中華文化の紹介を目的とする「麗沢叢書」を出版する際、そこに収める名著の翻訳を、『歴代畫論』を奥村伊九良氏に、『考槃餘事』を中田勇次郎氏に、『祕傳花鏡』を杉本行夫氏に振り当てたあと、諸氏から名と物に関する質問を受けたのがそもそのきっかけである。たとえば、そ

の書中に出てきた「籐墩」「桐油脚」とは如何なるものであるかという質問に対し、博士も一緒になって調べたことが「名物學の端緒」（「自序」単p. 3、全八p. 5）となったようである。

「桐油脚」についてはその時には解決がつかなかったものの、のちに、昭和十九年、博士が『名義瑣談』の一項として発表した。『名義瑣談』は『考槃餘事』『祕傳花鏡』の「序」などの論文とあわせて「名物学」の発端として『中華名物考』に収められている。

それ以来、博士は名物研究に情熱を注ぎ、次々と論文を発表した。昭和十九年～二十二年の論文を一冊にまとめて出版したのが『華國風味』である。
注2博士は「これが私の名物學建設の第一歩であった。」（「自序」単p. 4、全八p. 5）と位置付けている。

その「第一歩」の研究と関わる重要資料として青木文庫に『鄙事備忘』『竹窓雜鈔』（一、二）といったノートがある。昭和二十～二十一年のものである。これらのノートは飲食関係を主な内容としている。そのうち『竹窓雜鈔』（一）の冒頭に「鄙事備忘續編也」との注があり、時間の上でも内容の上でもこの三冊のノートは連続性をもっていると考えられる。『華國風味』中の一論文である「落雁と白雪饅」などは、『鄙事備忘』の数多くの條目を基礎資料として書かれていることが伺えるし、またそれ以外の部分でも、『中華名物考』のもととなっていると考えられる條目を数多く含んでいる。

昭和二十一年の四月～十二月、博士は京都大学で「名物學緒論」と題してはじめて講義を行っている。「何しろ前人未發の試みなので、組織に相當苦勞したが、楽しくもあった。」（「自序」単p. 4、全八p. 5）とあり、博士の苦勞と喜びが窺われる。のちに訂正、補足してから、九州大学で「名物學通論」と題して講義し、その後、山口大学と立命館大学でも同様の講義を行っている。「その都度多少の修正は加へたが、未だ是を一冊の書として世に問ふだけの自信はもてない。因て今回本書を出版するに当たり、その要旨を節録して卷頭に置き、私の謂はゆる中華名物學の體系を公にすることとした次第である。」（「自序」単p. 5、全八p. 5）と博士は説明している。これがつまり「名物學序説」である。昭和三十四年、博士が長年にわたって研究した名物学の成果をまとめて出版した『中華名物考』なかで、その卷頭におかれ

た「名物学序説」は初めて名物学の理論体系を確立したといえるのである。

以下「序説」の内容に沿って名物学についての解説を加えることにする。

『序説』によると、日本で最も早く「名物学」ということを論じたのは白井光太郎博士の『本草学論考』に収められる「博物学者としての貝原益軒」と題する講演（大正二年四月）の速記においてであるという。そのなかで白井博士は、名物学が本草学、物産学と並んで博物学の一部であるという認識を示し、さらに、名物学を「物の名と實物とを對象して調べる、歴史とかいろゝの書物に出て居る所の禽獸草木其外物品の名實を辨明する」学問と定義し、その必要性について論じている。

そもそも、中国で「名物」という言葉を記録した最も古い書物は『周礼』であり、それによれば周官が「名物を辨ずる」ところから名物学が始まったということになるだろうが、青木博士はそれは事実として認め難いとして退け、名物学はむしろ「訓詁学の一部として、一體不可分の密切な関係を保ちつつ発生して来たもの」と考える。訓詁とは字義の研究であり、訓詁学とは言語文字の学の一つである。博士は現存最古の訓詁の書『爾雅』の全篇目のなかに、言語の訓詁が三篇あるのに対し、名物の訓詁が十六篇あるという事実を指摘し、名物学が訓詁学の一大部分として発生したことを証明したのである。

その後、『小爾雅』『廣雅』『方言』といった書が続くが、それらはいずれもまだ訓詁学の域を出ていなかったといえるが、後漢末に至ってはじめて劉熙の『釋名』という名物の訓詁を主とする書が現れ、博士はそれを「名物学独立の端緒」として高く評価した。前著との決定的な相違点として、著者の劉熙が「名物学的自覚」を以てこの書を著していると認められること、また、『爾雅』と比べ、単なる訓詁ではなく、「説明が具体的であって要領を得易く、一段進歩の跡が認められる」ことが挙げられている。

また、「『爾雅』も『詩經』の訓詁を主として出発した学であるから、名物学の根源は『詩經』の名物学に在ったと言へるであろう。」と、博士はもう一つの名物学の源を指摘する。同時に、『詩經』の名物学の研究が重視される原因は孔子の詩教にあったと分析している。すなわち、陽貨篇に孔子が詩を学ぶ益として挙げた「多識於鳥獸草木之名」という一條、つまり、詩を

学ぶことによって多くの動植物の名を識ることができるという孔子の教えが影響を与えていると考えるのである。博士は呉の陸機の「毛詩草木鳥獸蟲魚疏」の例を取り上げ、「本書の體例は、詩の一句を擧げて、其中の動植物につき今名及び方言の差異、形状食味藥性等を具に説明してある。故に「釋名」が尚ほ訓詁を主としてゐるのに比し、是は物質の研究を主としたから、純粹な名物學は此に始まると謂ふべきであらう。」と、詩經の名物學の研究を高く評価している。

ほかに、名物學との交渉をもつ分野も多いが、博士は主に顕著な六方面を取り挙げて「名物學の展開」を説明する。

- a. 礼學方面（「三禮」の注疏、函解。）
- b. 格古方面（考古学的古器物珍玩、宋以降の文房具愛玩。）
- c. 本草方面（藥學、兼、動植鉱物學。明、李時珍『本草綱目』にて集大成。）
- d. 種樹方面（園芸學。植物動物の品目性状等を記述。譜録類に多し。）
- e. 物産方面（地方の物産に関する記録。史部、地理類、雜記之屬。）
- f. 類書方面（万般の物品事象に関する古来の文献を類別編集。明、王圻『三才圖會』。）

清に入ると、名物學の研究はさらに専門化へと進んで、『釈名』のような類聚の名物學より、「特に或る限られた名物を取り出して研究する」考証學的名物學へと發展した。博士は主として衣服、飲食、住居及び工芸という四つの分野に分かちて概略を述べるが、そのいずれの分野に於いても、詩經の名物研究が考証學的要素に乏しいのに比し、「三禮」に関する研究が最も興隆を極めてゐることを指摘する。その結果、清代に於ける考証名物學は、礼學において著しい發展を遂げたと結論づけている。

名物學は訓詁の名物をもつて花が咲いて、考証の名物をもつて果実が実ったとでもいえるであろうか。

『中華名物考』の出版は名物研究の發展期を示しているといえるが、ここで再び青木ノートとの關係に目を向けてみよう。

『中華名物考』は以下のような論文を含むが、それらには前掲の『鄙事備忘』『竹窓雜鈔』のほか、『鴻城雜記』『鼓東雜錄』『借讀鈔存』といった青木ノートとの關係を見いだすことができる。

○袖の香頭 ○酒觴趣談 ○唐風十題 ○香草小記

○『支那』という名称について

○『嘯』の歴史と字義の変遷^{注3}

ここで、その一つ『柚の香頭』との関係について取り上げて見よう。『借讀鈔存』(五)には『舜水朱氏談綺』(京大東洋史研究室桑原文庫本四冊)についての抄録がある。其の後ろに博士が次のような感想文をつけ加えている。

此巻名物を明らむるに益少なからず、余嘗て「橙」のユズなるべきを考へ、おりおりその考證資料の蒐輯を心がけしが未だ確證を得ざりしに、此巻には明らかに之と訓ぜり、甚だ我意を得たり。又嘗て支那の詩文に梅花の香を詠ずること多く、而も我國の梅花さほど香らざるを怪み是を風土の差異に歸すべく考へ居りしに、此巻には明らかに支那梅花の日本の梅花に比し香深きことを言へり。その他魚類鳥獸名などの和訓の誤を正せるも誠に我意を得たる事少からず。頃者余菓子落雁の名義を考ふる資料に此書を借閲し、因て此巻を見出し得て喜び禁ぜず、遂に暑気を凌いで病餘全巻を抄寫す。

昭和廿一年七月二十五日朝 正兒識す

翌年、博士は『柚の香頭』(二十二年九月)を書いた。中には次のような内容がある。

ところが偶然「舜水朱氏談綺」を閲して確證を得た。此の書は明末亡命して我が水戸光圀に仕へた朱舜水の言説を、門人安積澹泊が備忘の爲に記録したものであるが、其の卷下の語彙集の中に、

橙子、ユズ。日本ニテ柚と云ハ誤ナリ。唐山の柚、上ニクビレメアリテ肉ナドナシ。下ニ肉アリテ徑六七寸アリ。云云

と見えてゐる。朱舜水は彼我兩國の實物を知り、これを比較して言ったのであるから、此の一語は信じてよいはずである。私は是を見て我が推定の誤たざりしを喜び、ほっと安堵の胸を撫でおろした。

(『中華名物考』(単P.74~75、全八p.53~54))

博士は自分の推測が『舜水朱氏談綺』によって実証されたため、大いに喜んだ。そのことが『柚の香頭』を書く自信をもたらしたに違いないが、それは、このノートの存在によってより明らかになったことと思う。

その余勢を駆って、二十六年十月に「香橙」、三十三年九月に「田中博士の橙説を駁す」との二篇の論文を発表する。ちなみに田中博士の論文の要点についてはやはり青木ノートの一冊『鴻城雑録』に詳細に抄録してある。田中博士の橙説を「駁す」ことになるのはノートに筆録してから何年も後のことである。博士の学問に対する態度がきわめて真剣であることが示されているようだ。

昭和三十七年、博士の『酒中仙』（筑摩書房）が出版された。すなわち博士が亡くなる二年前のことである。これは博士の飲食名物研究の異色の作である。酒に関する名物研究は前述の『中華名物考』のなかに「酒觴趣談」の一章もあるが、まだ十分にその説を展開しているとはいえなかった。従って、『酒中趣』は酒に関する総合的な名物研究と言えよう。博士は「酔迂叟」と自称し、また、「酒はもとより吾が性の愛するところ、酒の書を著すことは、楽しみ中の楽しみである。」（「酒中趣の序」）と述べている。此の本の「抱樽酒話」と「酒の肴」は、青木ノートの『竹窓雑抄』（一）（二）、『借讀鈔存』（三）などとも密接な関係があるが、ここでは具体的な説明は省かせてもらいたい。

上の説明をまとめると、博士の名物学の成立は四の段階があると思われる。第一段階は準備期である。つまり風俗研究の時期である。第二段階は研究の初期である。つまり『麗澤叢書』の翻訳に当たって学生の質問を受けたのがきっかけで、「名義瑣談」を発表する時期である。第三段階は研究の発展期である。つまり、飲食名物学の『華國風味』の出版された時期である。第四段階は研究の成熟期である。具体的な研究だけではなく、理論上名物学を学問として確立させた。前掲の青木ノート並びにほかの風俗資料はいずれも博士の研究軌跡を証明し補完するという意味で、大きな学術価値を持つと考えられる。

三、青木名物学の将来とノートとの関係

博士は京都大学を退官する前の年、「最後の講義に何か変わったものを置土産に」と思って、試みたのが『名物學緒論』で、二十一年の四月から十二月

まで續けた。」（「自序」単P.4、全p.5）と振り返っている。博士がわれわれに残して下さった「置土産」は今やまさに数多くの名物学の貴重資料と研究課題ではなからうか。

青木ノートの学術価値は前述の名物学の裏付け資料だけではなく、これから名物学研究をさらに深めていくために、参考になる資料でもある。たとえば、楽器、化粧品、服装、家具、陶磁器、及び風俗慣習等の内容は未だ素材として眠ったままである。なかでも注目すべきことは日本の名物関係の内容である。たとえば物事の起源に関するものだけでも次のような條目がある。

- たぬき汁（「鄙事備忘」）
- 天麩羅の始まり（「竹窓雜鈔 一」）
- 砂糖和製の起源（同上）
- 鯉を芽出度しとすることの起源（同上）
- 八幡山の竹（初めて電球が完成されたとのこと）（同上）
- 書院の起源と故実（同上）
- 宇治茶の起源（同上）
- 音羽の瀧の始まり（同上）
- とろろの起源説（同上）

博士の数多くの研究を見れば、日本に関する内容は主として中国の名物との比較のためであり、いわば比較名物学と言えるものである。前述の『中華名物考』中の論文「落雁と白雪饅」「唐風十題」「酒觴趣聞」などはまさにそれであり、またノートの中でも、たとえば上掲の「たぬき汁」の條目を見ると、博士は「支那料理の『煨毛鷄』と相似なり」と書き加えた上で『食譜大全』の「煨毛鷄」の内容を詳細にメモしているのが見て取れる。そのように常に中国との比較を念頭においていることが非常にはっきりと読み取れる。とすれば、ノートの日本名物の内容に注目することは青木名物学研究の将来像をも示しているのではないか。さらに言えば、中日比較名物学のみならず、東西比較名物学の端緒も窺われる。たとえば、『華國風味』には「用匙喫飯考」があるが、それに対し、青木ノートの『鴻城雜記』には「英國フォーク使用の歴史」の條目がある。前者は昭和十九年に発表されたが、後者は昭和二十五年にメモしたものである。博士の「フォーク」に対する考えは「匙」の延長線と言えよう。また、遡って昭和二十年の青木ノート『鄙事備忘』に「黒坊の手水壺」という條目がある。東西洋文化の相異によって人々の壺に

対する美意識と価値観が異なり、従って壺の使途も日本に伝わってから変わったという話である。すこし長いが、ここに抄録しておく。

黒坊の手水壺

黒坊雪隠へ行時は、小き壺に水を入れて携行き、糞を放たる跡を其水にて洗ふと也。極寒中にてても左の通りなり。其手水壺は籐にて手を附たる物にて、うち見には雅なる物なりと、同人の話なり。予近き比去方へまかりしに、主人插花を好む人なるが、此頃甚珍物を得たり、紅毛焼の花瓶の、しかも籐にて手を附けたるを求め出たりとて、したり顔にて取出したるを見れば、まがふべくもあらぬ黒坊の手水壺なり。予笑止に思ひて、此壺はしかじかの事に用ゆる、至て不浄なる器なりとさとしけれど、主人はなはだ不得意なる體故、強ても云ずしてやみぬ。云々。……（紅毛雜話卷一）

△正按、予が大学生の頃なりしと覚ゆ、歸省せしに二階の廣間の床に籐にて胴を網の如くかぶせ、上部に提手を付けたる瓶に花を生けたるありき。先考は南蛮瓶なりと語られき。是正しく右に謂ふ所の壺なりしなり。其後紅毛雜話に右の記事を見出し一抹不快の感を覚えしが、折角父が樂み居らるゝ品にケチをつけて不快ならしむるにも當らずと思ひて遂にもだしぬ。頃日再び此書を綴き、昔を思ひ出して抄録す。

（昭和二十年九月二十八日）

博士は不快ながら、名物の異文化の差異を忠実に記述したのである。

むすび

青木ノートは青木名物学の重要な一部である。また、青木名物学を研究するのに重要な資料でもある。博士の「元曲の研究」は中国文学研究の空白をうめ、名物学は中国文化の研究の空白の一つをうめようとしたものと言えよう。そういう意味で、青木ノートがそのなかに占めるべき地位と研究価値とを評価しなければならない。今日、比較文化の研究が大変進んでいるが、半世紀前に博士はすでに黙々と比較名物学の広い土地を開拓し、数多くの収穫をもたらしてくれたことを忘れることができない。博士の遺志を継承して、さらに青木名物学の研究を深めていくのはわれわれの使命ではないか。これは青木文庫が筆者に与えてくれた教示である。

なお、青木博士のノートを整理することになったきっかけは、一九九一年四月、筆者が中京短期大学に赴任したのち、京都大学の恩師清水茂先生の紹介と中京短大の学長安達寿雄先生の配慮で、名古屋大学文学部の今鷹真教授の研究室に週一回通い、研究室に所蔵する青木正兒博士の貴重資料に接したことにある。また、拙文と「資料 青木正兒ノート」の発表にあたって文学部の渡邊幸彦助手から貴重な助言を頂き、校正の労を煩わした。ここに、あわせて感謝の意を表したい。

注

1 ここにある『門票』も他の資料と同様に、大正十四年の北京滞在時のものであることを説明しておきたい。

『門票』には明記されていないが、宴会予約の訂單が一枚ある。その「訂單」は右のようである。

票中の「本月」はいつなのか。幸い博士の「年譜」（『青木正兒全集』第十卷）に、大正十四年「八月二十一日北京大學諸氏の招宴上、沈伊默、胡適、沈兼士、陳大齋、馬衡、張鳳舉等にあふ。於東興樓。」という記述があり、この「訂單」の記録と符合する。よって「門票」は大正十四年のものと推定できる。

また、これによって博士の中国文壇の名流達との交流も窺われる。

| | | | |
|-----------------------|-------------|-------------|--|
| 座 設 東 興 樓 | 教 | | 本 月 二 十 一 日 即 星 期 五 下 午 七 句 鐘 潔 樽 候 |
| | 周 作 人 | 馬 裕 藻 | |
| 張 鳳 舉 | 胡 適 | 沈 兼 士 | 陳 大 齋 |
| 拜 訂 | | | |

- 2 『華國風味』については岩波文庫本に戸川芳郎教授の詳しい解説がある。
3 ちなみにこの原稿も青木文庫に保存されている。